

「ありのままのわたしを生きる」ために

その後

第3回

「小石であることのこわさ」

土肥いつき

京都の公立高校教員。24 時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

2010 年 6 月のある日、1 本のメールがきました。差出人は日本映画学校の学生さんでした。なんでも「卒業制作で性同一性障害をテーマにした映画をつくりたいと思っている。とりあえず一度会ってほしい」とのことでした。東京からわざわざ来るのかと思いましたが、「いいですよ」と返事を出しました。それから数日後、京都大学近くの居酒屋で彼らと会いました。

当日はセクシュアリティの話はほとんどせず、ひたすら在日外国人生徒交流会のことや部落の生徒の話をしていた気がします。

それからしばらくたって、正式にわたしを題材に映画をつくることにしたとのメールがありました。映画「Coming out story」制作のはじまりでした。

それから約半年、監督の梅沢さんとはどれほどのビールを一緒に呑んだかわかりません。撮影クルーは京都駅近くの古いアパートを借りていたので、電話をすればすぐに京都駅に来られます。なので、どこかに行った帰りに京都駅まで撮影クルーを呼び出して、近所のコンビニでビールを買って、駅の裏にある公園でビールを呑むという半年でした。撮影も終わり、12 月にクルーがアパートを引き払ったあと、ものすごい喪失感があったことを、今でも覚えています。

できあがった映画を見て、はじめに思ったのは「この映画、豊島さんの映画じゃん」でした。豊島さんは撮影クルーのうちのひとりでした。豊島さんは、わたしという「小石」にけつまずくことで、自分の中にあった過去の自分とふいに向きあいます。そこから豊島さんの迷走がはじまります。その迷走をカメラは丹念に追いかけます。映画の中に、豊島さんがトランスジェンダー生徒交流会のサポーターの A さんに相談するシーンがあります。そう言えば、A さんも、かつて迷走していた人でした。そして、きっと監督の梅沢さんもまた、映画の撮影を通して迷走したんじゃないかなと思いました。

思い返せば、「小石になればいい」と思いながら、さまざまな交流会をしてきました。そんな中で、たく

さんの人が「交流会」という小石や、そこにいる「わたし」という小石にけつまずき、新たな「誰か」と出会ってきました。ただ、「交流会」というシチュエーションは「けつまずく」ところなので、そんなに不安はありませんが、ごくたまに「予期しないけつまずき」があります。そして、時としてその「予期しないけつまずき」が、けつまずいた人の「心のなかの小さな箱^{注1}」のふたを開けてしまうこともあります。

ある人権関係の集会でたまたま出会った M さんもそんな人でした。教員であり、結婚していて子どもがおり、人権教育にかかわっている M さんは、年齢も含め、あまりにもわたしと境遇が似ていました。しかし、境遇が似ているからといって、同じようにトランスできるわけではありません。「自分も性別を変えたい」という M さんに「大丈夫、できる」とはとても言えないわたしがいました。それでも M さんは周囲に粘り強く働きかけながら、10 年以上かけて性別を変えていきました。しかし、その過程で失ったものも、きっとあったんだろうと思います。もしもあの時、あの集会で M さんと出会っていなければ、M さんは「それ」を失わずにすんだんじゃないかと、ふと思うことがあります。もちろん、きっと M さんはそんなわたしを笑い飛ばされるとは思いますが…。

ただ、M さんのように「結果オーライ」なばかりではありません。「きっと小石にけつまずいて、転ばせてしまったんだろうな」と思い、とりようのない責任に恐怖を感じたこともあります。

しかし、わたしも O さん^{注2}のひとつこと「君は女装して外出したこと、あるの？」という小石にけつまずいて、今があります。きっと誰もが小石にけつまずいて、こけそうになりながら生きているんだろうなとも思います。映画「Coming out story」の最後で、わたしは迷走する豊島さんに言いました。「ゆっくりのんびり、まわりに働きかけていけば、きっと居心地のいい世界ができるよ」。この言葉は、今もわたしが自分自身に対して言い聞かせて続けている言葉です。